



七部集

雪中庵蓑太考
翠兄聞誌

中村俊定文庫
文庫 18
402



七部集

雪中庵 荻太考
羽平兄 聞誌
冬之日尾張五哥仙云
炭俵 猿蓑 春之日瓢乃内

無門關

白潜居士 鼠腹序
荻太翁 頌
素秋之論

三鳥
表以下廿一章心得

水鳥文庫

荷兮 杜園 野水

翁 野水 重五 杜園 荷兮

野水 重五 翁

子多二... 依者... 趙州... 婆子... 勤過... 明日... 漢土... 秋蟬... 夜半... 越... 寢

杜園

後文治... 四年... 誤

重五

翁

貞徳 初

此... 後代... 紀... 阿波... 文治... 三年... 五月... 阿澄... 阿波... 文治... 三年... 四月... 廿一日... 後

杜田

羽生

主五

野水

杜田

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

也三十丁なる男と云ふに海士ヲ漁みもカキハ江上ヲ去て二十三年と有田城を占む

礼記曰人生十年曰幼二十曰弱三十曰壯有室曰家三十と押して付たる

七丁の條西南に七日の月の多しと云ふは草の油をホシ葉引る

と云ふは油をホシ一説ト本を養木と讀譯ての誤なりひつるは賤の條に

の油を付てふまは誠ニ誤也ふし付て効驗に撫子と云ふ是の粟

ふと誤れし餅工産とて流りて付たるは穀手向ふ雨七或は疫病除也

乃さるは草履の官更に平泉に功ありあつて羌人神と云ふは木像を母屋の守

と云ふは天族のトトトトと云ふは當の巨物なりと云ふは南東の地を南東を

して南東と云ふは平泉の川に流るる所也云々云々身終の地なり

故に云ふは平泉の所なり云々云々奈色のかすり云々云々田籠してあつて是の秀吉

乃由金や大和に納るるの墳ありと云ふは平泉の所なり云々云々

平泉の附に平泉に平泉の根を押して七種踏を付たるは賤を是と云ふは

平泉の附に平泉の所なり云々云々平泉の所なり云々云々

平泉の附に平泉の所なり云々云々平泉の所なり云々云々

平泉の附に平泉の所なり云々云々平泉の所なり云々云々

平泉の附に平泉の所なり云々云々平泉の所なり云々云々

杜田

羽生

主五

野水

杜田

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

野水

此區序註
其角句
其角句
其角句
其角句

峻阜山は流石厚己郡世之稻草山は西の海をさるる小蛤買工自由な
限りかゝるや付たり。表六章。意名不表を表へ出すの監餽一表六
意名一奇仙一巻を縮たる。表八章も準し。
猿蓑大意。在凡の仙遊所あり。理屈を致れば集りて安情調を流たり
凡し元禄四年辛未の友嗟家の後集をいひての撰りてけり。經も又さ
そのころ今古をさたり。は集りて仙遊の古集こといひて心こもて立たり。此
のこと。いひて返り面。承白集さ。之の文の内月をの面起する時あれやと
見して脚て仙遊の面目といひて。五徳。いやくと云。ホリリ下。うの業
と和雜子ありて女子はさたま。人か心をかりて多敷く本名を知えたりを
いひて。つとてその妙。在凡一秘。有る。骨を此。西の撰集抄よる
ゆへて西之骨をて人を作しけり。骨をりし。西上。撰集抄の文中。流る。意名
るると。猿蓑集の観とふき。又流る。骨を。師説て尋口。猿と。小菘。と
は。骨。つとて。伊賀。説。中。つとて。人。と。小。骨。を。と。説。つとて。猿。と。人
と。い。ま。ま。の。義。不。て。ん。と。仙。遊。の。精。神。対。而。の。安。情。よ。考。考。つとて。知。る。さ。は。し。の
字。仙。遊。の。竟。字。眼。と。云。い。は。さ。り。に。け。り。は。城。南。老。宅。下。松。平。忍。守。政。臣。久。松
甫。山。立。テ。ま。の。即。也。今。海。山。の。鐘。子。對。つとて。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。
ぬ。口。ま。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。
新撰字鏡曰。伊佐佐古。廣延。山城國葛野郡池浦村。有。又。遍。照

此區序註
其角句
其角句
其角句
其角句
其角句
其角句
其角句
其角句
其角句
其角句

寺也。ト云。東西。二。南北。二。程。留。市。部。い。い。い。或。説。三。派。鬼。と。い。と。大。嶋。の。只。一
羽。池。子。と。い。は。す。淋。し。い。情。多。裁。篇。回。於。保。加。里。又。曰。比。志。以。伊。田。為。う。れ。舟。人
小。か。ま。る。は。て。あ。ら。う。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。
つとて。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。
悔。せ。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。
る。そ。骨。を。在。下。揖。枕。あ。り。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。
よ。い。や。れ。あ。ら。う。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。
こ。の。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。
女。鹿。尾。の。女。こ。の。常。隨。制。新。撰。雜。今。海。山。之。以。供。朝。夕。矣。聖。女。の。大。悟。り。人
也。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。
堅。田。の。名。物。之。其。角。句。堅。田。の。七。生。子。れ。い。や。丹。丹。の。名。物。也。丹。丹。の。名。物。也。丹。丹。の。名。物。也。
焼。う。め。の。子。は。例。第。津。宿。上。焼。う。め。の。餅。名。物。也。丹。丹。の。名。物。也。丹。丹。の。名。物。也。丹。丹。の。名。物。也。
赤。柏。雲。月。朔。日。小。神。の。供。出。ま。す。あ。り。赤。柏。流。の。巻。七。折。の。一。種。口。あ。か
ら。う。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。
後。さ。う。て。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。
供。で。盛。う。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。い。は。す。と。
聖。女。之。時。之。和。名。抄。大。膳。職。於。保。加。之。渡。天。乃。巨。加。佐。与。り。本。居。官。長。名。美。八

方姓後京正五位下左近衛中將小一条左大臣師尹公孫侍從宣時子放

事於白一条院以時子行成殿上口端之間取行成之冠授許小庭之此過

三ヨリ陸奥守にナサレ任國ミテ卒ス一説ニ東方馬三乘テ道祖神ノ山所過ル

トキ下馬セヨリ人ノ玄ケルカカマ馬俄ニクテテテ其方トモニ死ス其社例三埋ハ

向のミチ也葵の日向もの人初微たた六エあひ葵花の町ふく人の何及

つれてさやなるきとよの字カ何の七十卒の老臨村中忠乃とノ監書

云つても也信来ノ宇洛基山一ノ初ノ系攝上何と云つても山末田を依る

流流のくひの田噴古雅子ものことと云されは田吹子を管我川流其川

流子といふ川流の吹ひもすめあすらあるといふ流流の川口は必見川流を噴

ふく眉攝也五花の空肩掃せ侍めて美人の姿工方と云たり也沈在

市神の法隆寺大和国平群郡アリ用明帝元年聖德太子十五歲の時

建立也別太子の幼稚の形をたはつた子やあつた万葉集廿四能守

歌「たむらこりままらん子泣らん母の心せまじん吉次つ野老」

更後の金高人をたてし名のもとをり時経「まご牛あかといひし」

付てる名「下りあふり」あま経たまこさへつる「まご也田原のうひとさ育

今あふれ信の者もよの「丹川の」合飲の花初あつきと云たりとも「田草堂

正妻

野童

翁

宗次

不知

不知

不知

不知

不知

不知

不知

不知

不知

不知

不知

之蓮池「...あふれ信の者もよの「丹川の」合飲の花初あつきと云たりとも「田草堂

白く初めゆく廿三つしものひの病そその「予子」去来ったけはる去来う許子

則東の初し「...」一「つとら」あひくは感懐ありて自然のあふれ合衆の

流中各人のあふれ「...」あまつとくは上客とつては放縱之作者と手次と云

の流中あつた子のあひ「...」あまつとくは上客とつては放縱之作者と手次と云

二句の入集を乞ふ「...」あまつとくは上客とつては放縱之作者と手次と云

多「...」あまつとくは上客とつては放縱之作者と手次と云

戴た「...」あまつとくは上客とつては放縱之作者と手次と云

亦子時珍本草曰蓮其根其根其美蓮其莖葉荷團「あつ」と「あつ」

祈「...」あまつとくは上客とつては放縱之作者と手次と云

此蓮池の庵の白蓮の池はもと昔にあり

梓 白 車末 竹節 赤 葉好羽紅

白兆 白 全工

白兆

已たる云々... 梓... 白... 葉好羽紅... 車末... 竹節... 赤... 白兆... 全工... 白兆... 梓... 白... 葉好羽紅... 車末... 竹節... 赤... 白兆... 全工... 白兆... 梓... 白... 葉好羽紅... 車末... 竹節... 赤... 白兆... 全工... 白兆...

自兆 智月 式之 木 乙州前文

勝浦 名馬

前

附 猿蓑五巻 鳥去来 白服 史邦 去来

史邦 去来

伽藍の越... 伽藍の... 白... 葉好羽紅... 車末... 竹節... 赤... 白兆... 全工... 白兆... 梓... 白... 葉好羽紅... 車末... 竹節... 赤... 白兆... 全工... 白兆... 梓... 白... 葉好羽紅... 車末... 竹節... 赤... 白兆... 全工... 白兆...

平野水
 大和合
 赤子棚
 先の口
 笑
 赤六六
 左の口内

平野水
 大和合
 赤子棚
 先の口
 笑
 赤六六
 左の口内

平野水
 大和合
 赤子棚
 先の口
 笑
 赤六六
 左の口内

平野水
 大和合
 赤子棚
 先の口
 笑
 赤六六
 左の口内

平野水
 大和合
 赤子棚
 先の口
 笑
 赤六六
 左の口内

平野水
 大和合
 赤子棚
 先の口
 笑
 赤六六
 左の口内

まじ
まじ
まじ
まじ
まじ
まじ
まじ
まじ
まじ
まじ

一ノ下ノ一軍師の種多の各物禁中ニ入るるまで清様の年ノ花はさう多し
白く花けし上落めきつたるものニ好むのやばき川原金糸と秋多の
白作てな放あらしひは持造三ノ秋風とあれはさきまの甘即花つたの
ハユおきやめく人命婦のういけの市ウ組と云て再考させや御妙
酒成者表紙に兵命婦五命婦の娘ニ国更曰志留浦也の作平あき上之
幼き心懸仁の初者と云く親の腹を悪心の作の孫陀仏を治たる有
白白石原丸とつるふ者をさしは花見中する有依と花見次郎ト
ハシリノ矢初房庄屋の核と名木有は極の花望るるニ花望りつて
つく我身の上とあはれ斗ま首死し子の意つく成は妙の意ハ
東坡と云の作してあ白沈した水ハ顔白黄金を多文不原の女子の一重
一休禅師も成道あふる時一上りよき若子一編添て如來の面目切
つて海一目てさう意と成り若き神を法行をたの産のたうと云
ぬハ蘇井六白あの際と三井とづやを既世即て付たりお秋夜湖
あまをて静し睡をまは法凡陰来あはば不興 年山度世とて朱
は似たり 是こふ起意の詞をとおとあらはれ心を静した付こ
伊勢物語あおむあまの 出の玉のあをんを治はく入玉借ひてよ
あまの物語見

まじ
まじ
まじ
まじ
まじ
まじ
まじ
まじ
まじ
まじ

前
前
前
前
前
前
前
前
前
前

○その花のほけの石り上人の碑せより花の形ノ一ノ塊ハ西のそととて
又名てその月月の以成りとも風花又云く 蘇波は若志 万葉
山波人あ火焚あはれけたとあう妻アを床めつらふれ 藤山口附
中て法ハ對之 第三 妹ノ骨朽也上花林と夏子をま(まを及花
とあてり西のとおと曲師をむけたる才三件位侍たり 南内一九月九日
无酒意 東麓下 加茂の末社ハ胡ナ千代柏花と有そ氏子有と
南年のこまを神供と云又神のこまを治て種まはると 花ノ道 関
更曰何より根のあはれをくくして去の花と懸わたり付あ
或智珠の仏も法も微とよまはとあめ終し 妹六曰けり甚むつ
一ノ解成るし先の徳と云るものあは 顔會曰微支類取切微取
説文物中久而青黒也然ハ以微ハ夜夜のうむく数は 解せんともふ
次の歎を吞と云ふ照し合せさる月花も執事ハけり別五款六莖の
まめう集ら葉障成一と映てそ有為莖款を捨てそあふたふ人との心
よああらん 歎を吞 国更曰花の観およりそ言 釋妙あとの又出あ
又あ葉ハ山吹やそを徑師の抱衣ハ衣の醜藤色ハ山梔子より染るあ
ふれをうやけ山吹ハ葉のるこ花輪造をえしうて吞と云るもあ

△前見合

○再考

全野水 鏡

春の日の巻
春の日の巻

進の巻
進の巻

五五

春の日の巻
春の日の巻

春の日の巻
春の日の巻

春の日の巻
春の日の巻

春の日の巻
春の日の巻

沙明集三 五の中を振ると共々 微々として元立をうり 涼院のあしき 懸念連生

坊八十を三見さ 河をいとく とうらふ 春の日の巻 八十三の男の子を八十三と云ふ

しかりけり 八十を三見さ 八十三の男の子を八十三と云ふ 八十三と云ふ

春の日の巻 八十三の男の子を八十三と云ふ 八十三と云ふ

乃所く 九州會津の城を 送り 来る子づつ 七牛の勞た 起る宿を

後をの 追加 指大子 あり 天國 文曰 以 眼 牛 追 那 岩

乃所く 九州會津の城を 送り 来る子づつ 七牛の勞た 起る宿を

乃所く 九州會津の城を 送り 来る子づつ 七牛の勞た 起る宿を

乃所く 九州會津の城を 送り 来る子づつ 七牛の勞た 起る宿を

越人

春の日の巻

春の日の巻

春の日の巻

春の日の巻

春の日の巻

春の日の巻

也 雄略書之時 帛紗 故 太 奈 姓 給 了 一 葉 あり 垣 ぬ 妙 子 子 了 矣

壯 年 の 者 の 成 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉

内侍の撰 世の美人の國を撰 字一た 一た 一た 一た 一た 一た 一た 一た 一た 一た

廿九日早天 於 根 出 あり じ り 九 日 の 月 の 出 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉

岩木 九 石 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉

春の日の巻 八十三の男の子を八十三と云ふ 八十三と云ふ

春の日の巻 八十三の男の子を八十三と云ふ 八十三と云ふ

春の日の巻 八十三の男の子を八十三と云ふ 八十三と云ふ

春の日の巻 八十三の男の子を八十三と云ふ 八十三と云ふ

春の日の巻 八十三の男の子を八十三と云ふ 八十三と云ふ

春の日の巻 八十三の男の子を八十三と云ふ 八十三と云ふ

春の日の巻 八十三の男の子を八十三と云ふ 八十三と云ふ

春の日の巻 八十三の男の子を八十三と云ふ 八十三と云ふ

春の日の巻 八十三の男の子を八十三と云ふ 八十三と云ふ

序をひきくくをやはり序といたし

○記 山あり遊女の記画をこそ人の昔談の出来たるをよる記といひ心ま

○紀 時のまをわらうらふとわら極まるを記といふ身一日を紀といひ

○傳 傳は世人のそをそなうてくるは先祖系圖よりき流るるをそをそ

○碑 昔に宮室に何れもつるは紀は碑は切徳の文章也切徳の碑は切

○謀 ^{ルイ} 魯ノ哀公孔子の謀をつるは始まる其謀曰 昊天不弔不敷遺三

○哀辭 誅に似て誄服も唯つるむ細糸のそをそ

○祭文 あら祭文と曰ひ呼君をよむる我又何をんそも一禮ありて我

○風 風俗の風を振るといふ義理と心げへてはるも風のある節に

○賦 客をよきてはそを遊女の尺中を振るといふ賦と常をてりる句

○比 比は心まをわらうらふとわら極まるを記といふ身一日を紀

○興 興は心まをわらうらふとわら極まるを記といふ身一日を紀

○雅 雅は心まをわらうらふとわら極まるを記といふ身一日を紀

○頌 頌は心まをわらうらふとわら極まるを記といふ身一日を紀

序をひきくくをやはり序といたし

○記 山あり遊女の記画をこそ人の昔談の出来たるをよる記といひ心ま

○紀 時のまをわらうらふとわら極まるを記といふ身一日を紀といひ

○傳 傳は世人のそをそなうてくるは先祖系圖よりき流るるをそをそ

○碑 昔に宮室に何れもつるは紀は碑は切徳の文章也切徳の碑は切

○謀 ^{ルイ} 魯ノ哀公孔子の謀をつるは始まる其謀曰 昊天不弔不敷遺三

○哀辭 誅に似て誄服も唯つるむ細糸のそをそ

○祭文 あら祭文と曰ひ呼君をよむる我又何をんそも一禮ありて我

○風 風俗の風を振るといふ義理と心げへてはるも風のある節に

○賦 客をよきてはそを遊女の尺中を振るといふ賦と常をてりる句

○比 比は心まをわらうらふとわら極まるを記といふ身一日を紀

○興 興は心まをわらうらふとわら極まるを記といふ身一日を紀

○雅 雅は心まをわらうらふとわら極まるを記といふ身一日を紀

○頌 頌は心まをわらうらふとわら極まるを記といふ身一日を紀

あなかりいぬといふまゝありて頌はよと神を多に其神徳を稱し奉るべきを
日光の妻を奉る事の句神詠山の何の本の花といふ皆頌体あり何れ神
に對して何れなく有疑し言しといふるが別頌ありといふるを謂歟

七部集解 翠兄撰

井六の紙没入文化元甲子を名見たり其時代現世す

右の源本書誤多し字中一勘考して誤を訂正し字といふも解しう移るゝ其
後して字也紙枚五十五葉を今編てめ形字中月八月より十四日迄七日五早ナリぬ
雪中房茶太翁の傳を翠兄の著三條の説を加たり南更の説も載たり又
標山常侍のゆせと載たるを考れ文化より文政の初の次著たるもの翠平
兄の空言はる人なるといふ地名俗姓知れ及予既書注捷で加置と乃

大鏡 文政筆 伊賀方大 鏡引子 著

明治十四年八月

大陰曆七月吉
立秋節 我書者德並
後學子清書可致
金牛人舎 賞雅
古稀前年老人



